

言語の実在とはなにか

——アナグラム研究に至るソシユールの思考の同質性——

鈴木隆芳

要旨

ソシユールが晩年アナグラム研究と呼ばれる思索に耽ったことは良く知られている。また、彼がそこでやっていたことについても、多くが、それ以前のソシユールとはまったく別人の営為を見ることがほぼ一致している。本稿は、それとは反対のことを試みようと思う。つまり、ソシユールのアナグラム研究を、その挫折までも含めて、彼の思索の持続の中に置いてみようと思う。

序 言語の一次的対象とは

言語の機能や性質について具に考えるにあたって、私達は次のように自問することがある。それは、音素・語・文といった様々な規模の言語の構成物の中で、まず相手にすべきはどれか、ということである。もちろん、そうした各々に個別の分野を宛がえば、どれもが一次的対象となることは言うまでもない。音韻論、形態論、意味論等の諸分野は、それぞれが異なる規模の言語単位を扱う学問として実際に確立している。しかし、それらの学問上の自律性はひとまず認めるとしても、それでもなお冒頭の疑問を完全に払拭することは難しい。なぜならそれは、それぞれの分野が扱う対象がまっとうなものか、つまりは、そうした対象は実在し、探求の対象になるのか、という問いとして突きつけられているからである。

言語を対象化しようとする際、それを客観的・物質的对象としてのみ捉えようとどれほど努めたとしても、言語意識とも言うべき自覚がそれを阻もうとする。また、音素・語・文は単なるサイズの違いではなく、固有の性質を持っている。そこで、こうした対象のどれに言語意識が対応するのが問題となる。実際、文の意味のかけらが、音素にあるとは到底思えない。だとすれば、音素・語・文と目前にある対象は、一見、単に規模の異なる言語的構成物のように見えてはいても、「意識中に実在するもの」という基準に照らし合わせるなら、実は、そこにはまったく異なったヒエラルキーが存在するはずである。言語が心的現象であるこ

と、ならば必然として、その対象化も心的な操作であるということ、以上を前提とするなら、言語の実態を知るためには、言語意識を徹底して内省するのが先決となるはずである。大仰な言い方に聞こえるかもしれないが、問われていることは実に単純である。母国語のように熟達した言語を使用する際でも、学習したての外国語でも本質的に同じ事だが、言語意識は、なんらかの意味で、言述の一部なり全体が「意味あるもの」として意識されることで始まる。その時、意識上にあるもの、それを言語について考える際の一次的対象としたいというだけである。

一 音¹

言述を「意味」を度外視して細分化していけば、音素が最小の要素として表れる。一般に音韻論において音素は、二項対立の差異から成る弁別特徴によって同定されることで、言述を構成する単位として確立される。「両唇」「無声」「非鼻音」という弁別特徴を持つ $/p/$ が音素であると云えるのは、「両唇」「有声」「非鼻音」の音素 $/b/$ と、「有声性」の有無というただ一点においてのみ対立するからである。並行して $/p/$ は $/m/$ と「鼻音性」の有無において対立することで、二項対立の差異の束に還元された $/p/$ ・ $/b/$ ・ $/m/$ は音素の体系の成員となる。この作業はある程度続けていけば、当該の言語の音素すべてが機能的な差異に基づく体系を構成することになる。ここで注目したいのは、こうした差異の束に還元できる音素は、体系内での総数が限られているため、体系全体をイメージできることから、体系Ⅱ差異という観念を喚起するには格好のも

のであるということだ。そして、音韻論のこうした分析手法が認識一般に及ぼす射程は、音素のレベルを遙かに越えて、構造主義を根底で支える原理であったと言える。

ソシユールは構造主義の先駆者であると言われてきた。こうした言い方が構造主義からの懐古的廻行によることはもちろんだが、ここで読み取るべきは先駆者という言葉に込められたアイロニーであろう。それは、ソシユールを完全な構造主義者として解釈するには、多かれ少なかれ、なんらかの飛躍があるということを示唆している。かつては、この飛躍をいかに引き受けるかが、ソシユールを解釈することとほぼ同義であった。丸山圭三郎とヤコブソンは、そうした飛躍が知らずに跨ぎ越えていった、構造主義とソシユールを隔てる溝と真摯に対峙した言語学者である。違いといえば、それは二人が反対の方向を目指していたということである。丸山はその溝を埋めようとし、ヤコブソンはそれをさらに深く掘り下げようとしたと言っておこう。

それぞれのソシユール解釈を通じて、なぜ音素が構造言語学において、認識上の強力な装置になるかを見るために、まずは、丸山が『ソシユールの思想』で記号の差異について説明するくだりを引く。

実質から形相に移行する際の唯一の違いは、「p」↔「b」がその間に無数の物理的差異を含む連続体であるのに対し、/p/と/b/は不連続な網の結節点として認識される点にある。ラングの中には同一性か差異かの二つに一つしかなく、その中間的存在はないからであ

り、例えば、赤信号の赤色の濃淡によって、その信号性自体に変化が起きるのではないのと同様である。これが言語記号の離散的性格と呼ばれるものである。²⁾

ラングの仕組みは、0か1、Aかnon Aというデジタル的機構であり、差異が対立となる現象と、ラングの単位との間には違いが認められない。³⁾

丸山の主張の根底は、ソシユールに関する多くの「誤解」は、「原資料」を読んでいないことに起因するとしながら、もし彼らが原資料を読んでいたら、読み手はソシユールをより完全な構造主義者と見なすであろう、というところにある。「言語には差異しかない⁴⁾」という、「一般言語学講義」(以下「講義」)の周知の命題を敷衍しようという試みは、ここではひとまず達成されているかのように見える。ただ、こうした成功をもたらしたものはなんであるか。丸山は、ラングのレベルにある「言語記号」の性質を「同一性か差異か」の二者択一に追い込み、音素の弁別特徴を説明原理の基盤としている。というのも、ソシユールと構造主義の間の溝を埋める一つの手だては、否定的な差異の原理を、音韻論が主張する二項対立の原理において証明することだからである。それは、体系の要素としての音素と語を同じ水準にあるものと見なすことからきている。しかし、こうした同一視は本当に正しいのか。

音素/p/の「無声性」は、それを「有声性」と交替すると、直ちに音

素/b/という体系中の別の音素になる。一方で、ラング中の語の意味について、仮にそれが音素の弁別特徴のように、いくつかの要素から成っていることを認めたとしても、そのうちの一つを他の要素と入れ換えたところで、直ちに他の語に行き着くわけではない。音素の体系が、要素どうしの関係が緊密で閉じたものであるのに対して、語の体系は、体系がそこにあることは認められるとしても、それは「開かれたもの」であるからだ。体系内の要素の数にしても、音素の体系が比較的少数の有限個の要素から成っているのに対して、語の体系は音素に比べてはるかに膨大な数の要素を相手にしている。問題は、こうした二つの体系の違いを、単なる量の違いとし、その質の違いにあえて目をつむったことにある。結果、音素体系のデジタルな対立が、ラング中の要素を語ることに適用され、ラングも音素のように、二項対立の差異から成っていると措定するに至るのである。そして、このアナロジーこそが、ソシニールを正統的な構造主義者に仕立て上げる装置として働くのである。

もし、こうしたラングについての説明をソシニールが言おうとして言わなかっただけならば、こうした一連の作業には意義がある。ただ、ソシニール自身はそうした展開をむしろ拒んでいるかのようだ。

言語が他の制度いっさいと異なるのは、言語が日々幾度となく膨大な数の記号を相手にしているからである。それは、使用する駒の数のせいで非常に複雑な体系なのである。⁽⁵⁾

「膨大な数の記号」を抱える体系に至るために、体系中の「駒」の数を増やしても無駄である。これはそうした喩えが成立しないことを言っている言葉である。音素等の閉じた体系について言えることを、言語記号の「非常に複雑な体系」に当てはめることは間違いである。後者は前者の数的延長ではない。それはまったく別の異質な体系である。そしてこのことは、ソシニールは構造主義者の先駆者でさえないという帰結を導く。ソシニールは言い足りなかったのではない。言語の体系を他の体系との類似において語ることは、それが比喩としては危険であることを知って、慎重に避けていただけである。

ヤコブソンは『音と意味』についての六章⁽⁶⁾で、『講義』の中には、「素朴な経験主義」と「近代科学の構造主義的展開」が矛盾を孕みつつ混在していると指摘しつつ、ソシニールの学説は、その両者の中間段階に位置するという。具体的には、ソシニールは否定的な差異を強調する一方で、「音声学」の章では、音単位を純粋な差異の体系に還元しなかったことが批判的になっている。事実、ソシニールの音声学では、音素を二項対立の価値体系に分類することよりも「一つの音」を言連鎖の中でいかに区切るかに重きが置かれている。/p/を/b/・m/との差異によって同定するよりも、/pa/という音の連続の中で/p/がいつ始まり、いつ終わっているのが問題になっている。そこで、ソシニールは「同質的印象」によって/p/を隣接する音と区別しようとする。ひと続きの音を同質の聴覚印象によって同質の時間に区切ること、こうした聴覚印象に基盤を置くソシニールの音声学は、ヤコブソンに言わせれば、『講義』の

テーゼとの矛盾を呈し、そこに焦点を当てるならソシユールを構造主義者と言うことは到底できないことになる。同時に、こうした主張は、ソシユールを構造主義に至る「中間段階」に位置づけることによって、ヤコブソンらが属するプラハ学派の功績を対照的に物語っている。

私達はここでヤコブソンに反論して、ソシユールの構造主義者としての完遂を説くのではもちろんない。ただ、なぜソシユールは、ヤコブソンが説く音韻論に向かわなかったのかを考えたいだけである。

実は、ソシユールは自らの音声学が音素の機能的な分類にまで至っていないことを自覚している。つまり、ソシユールは自ら承知でそうしているのであって、彼の音声学は、ヤコブソンが思い描くようには進まなかったというだけで、少しも不徹底なものではない。「音を際限なく分類していくことは、言語学にとって、音素の言連鎖への組み入れほど重要ではない。」⁽⁷⁾ そう言うソシユールが重視したのは、孤立した音素が、どんな契機を経て他の音と結合するかという問題であった。そのためには、音素が言連鎖上で、「個」であることの確証を得ることがまずは肝心であって、それは、 $\langle p \rangle$ という音素が本当に一つの音か否かという音に関するの極めて原理的な問いに収斂していく。

ソシユールの音単位についてのこうした思索にはもちろん理由がある。彼が音を定義しようとしたのは、音素の体系化によって、そこからラングの性質に至る推論を行うためではない。彼が追求したのは、ひとたびその同一性が確立されたなら、たとえそれが語中であろうとも、また、その語が史の変遷に曝されようとも、語の確固たる一部としての同

一性を失わない音単位である。 $\langle p \rangle$ の特徴をいくら生理的に定義しても話しは始まらない。その $\langle p \rangle$ が語の中で同一の音として実現され、その音を含む形態の史的分析を支えることが重要なのである。

例えば、*salter* \rightarrow *sauter* の変化⁽⁸⁾ について説明しようとして、 $\langle l \rangle$ を音素の体系中に分類し、その音の弁別特徴を記述したところでこの問題は少しも解決しない。必要なのは、 $\langle l \rangle$ が子音 $\langle t \rangle$ に先だつ $\langle sal \rangle$ という音の連続の中で、不可避的にどんな音として実現されるのかということであり、そこで始めて、この形態の変化を説明する基盤としての音の同一性が確立されたとと言えるのである。

構造言語学が二項対立の差異の原理に基づいて、言語の体系（実際は言語以外の体系も含まれる）をどれほどうまく説明したとしても、それは言語にとって本来異質な体系を押しつけることでしかない。ソシユールを完全な構造主義者に仕立て上げて救済しようとも、または、ソシユールを未熟な先駆者と見下そうとも、彼自身の言語学はそうしたいはずれの解釈も寄せ付けない。それは、ソシユールが一次的な対象とすることで一貫している言語 \parallel ラングが、構造主義の音韻論との比較・対比によって決して理解できないということからきている。

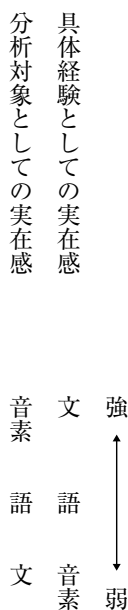
二 語

意味を言語単位の画定にとって必須なものと考えれば語もしくは文に行き着く。ただ、語と文の実在性の意味は根本的に違っているがゆえに、その異質性とどう対峙するかが今度は問題になる。文が呈する経験的な

実在性と、語の意識上の実在性には、共通の尺度があるとは思えない。

ブルームフィールドの意味に関する素朴な定義は文を対象にしているうちは正しい。「意味とは、ことばと関連する重要な物事、すなわち実地の出来事から成り立つものである。」⁹⁾ こうした言語によって誘発される行動や思考の反応を意味と見なすなら、語の意味とはそれに比べて極めて抽象的かつ観念的な水準に留まるだろう。語の意味と、それがもたらす語の意識における実在感とは、その判定の基準を文が属する世界に求める限り希薄になる一方である。

ここまで見てきた言語単位の諸水準を、今述べたような実在感に照らし合わせて並べると次のようになる。



音素の分析対象としての扱い易さはこの上ない。弁別特徴への還元のプロセスにはどこにも曖昧なところがなく、結果、各音素が緊密に関係し合う体系が得られる。ただ、こうした過不足のない結果に至る分析が、その認識上のプロセスにおいて、ある種の錯誤を内包していることは指摘しておきたい。例えば、 $/p/$ ・ $/b/$ の音素としての地位は、互いの差異によって確立されているというが、しかし、実際は、両者の対立は「有声性」において対立する以前から存在している。それは、 $/p/$ ・ $/b/$ が

現実の語において、別の語 $/pig/$ ・ $/big/$ として存在したときに解決済みである。「有声性」は、その対立を音声学的に表したものに過ぎない。それでも、ひとたび $/p/$ なり $/b/$ という音素があるとなれば、それが分析の結果得られたものであるという気がしてくる。その帰結として、そうした音素が当該言語の音韻体系を支えていると思ひ込む。

文はどうか。文はそうした分析を寄せ付けない。その意味が、なんらかの行動や思考を促すことに向けられているのは確かではあるが、そうした文の存在を保証するものは、他の文との差異ではない。少なくとも、意識上には差異の基盤となるような対となる存在がないのである。 $/p/$ と $/b/$ の間には「有声性」という二項対立に還元できる差異がある。では「あそこに山がある。」という文は、いかなる差異によって、どんな文と対立するのであろうか。

言語の使用における経験上の具体性を求めて文に至った段階で、私達は皮肉にもそれが分析の対象としては、まったく相応しくないということに気付く。そこで、文を分析するとは、その構成要素としての語とその結合について考えることであると言いたくなるが、しかし、そもそも文と語の間には不可侵の異質性があった。「語それ自身が文の分析から生じることはない。」¹⁰⁾ 本稿の最終的な目的でもあるソシユールのアナグラムを考えるとは、ソシユールにとって最も切迫した問いを考えることである。それは、文とは異質な語が一次的単位として表れる必然性を理解して始めてできることであり、多少先回りして言えば、そうした語の実在性を言語の唯一の基盤にし続けたことが、彼のアナグラム研究の恐ろし

いまでの増殖とやがて訪れる終焉を招き入れるからである。

時枝誠記が『言語学概論』¹¹において、ソシュールを批判したことは良く知られているが、語を言語研究の対象とするという確信の強さにおいて、彼はソシュールと並ぶ希有な言語学者である。時枝は、語という単位が、大した反省もないうまま自明なものとして了解されていることを危惧しつつ、言語単位を自然科学が扱う単位と混同してはならないと主張する。時枝の主張をもう少し敷衍するなら、原子的、量子的という言葉で彼が形容する単位とは、分析の究極にあるにせよ、主体の意識にとつて実在することのない人工的かつ抽象的な構成物であり、こうした単位が言語学において誤って単位と認められているのは、あくまでも自然科学との不当なアナロジーからであつて、言語学本来の手法によるものではない。そもそも、究境において到達する最終的な単位という言い方が、文や分節などを出発点に分析を始め、やがては単位＝語に至るといふ論理に基づいている。しかし、なぜそこで文を一次的単位としなければならぬのか。というのも、そもそも文は単語の集合体ではなく、文のみが言語の具体存在ではない以上、文と語は、言語において「先ずあたえられた処の二の全体」と考えるべきではないか。敢えて言うなら、そのどちらもが具体存在であり、分析（文から語）や統合（語から文）という粗雑な考え方で、両者の質的相違を無視するのは間違いである。では、言語単位の抽出についてどうかとなれば、その唯一の基準は、抽出される単位が「言語的」であるか否かということに、おそらくはなるであろう。「おそらく」とこの点について即断できないのは、語＝単位

は、「研究者の焦点に結像された全一体」で言語学の出発点となると同時に、その本質の究明が「言語研究の終極の課題」となるべきものであり、この語＝単位についての知見は常に言語学の原理のあり方を絶えず根底で揺すぶるほどの大問題だからである。

こうした時枝の単位についての思索は非常にソシュール的である。言語意識に問いかける限り語だけが実在する単位となる。言語意識そのものとしての語の存在——ここで時枝から学びたいのはまさにこの語の実在の根拠である。

三、言語単位の問題

『講義』はソシュールの思想を歪めているとしばしば言われてきた。¹² 生の講義録とソシュールの手稿をそのまま使用するのはなく、それらを読んだシャルル・バイイとアルベール・セシユエの編集作業を通してできあがったこの書物は、その成立の事情を鑑みればソシュール著というには確かに具合が悪い。ソシュールに関する誤解や無理解の原因を、こうした成立事情に求める傾向は根強くある。『講義』は、ソシュールを「写した「だまし絵」(trompe-l'œil)¹³」であり、ソシュール批判の多くが、そうした虚像に騙された結果であるという。

では、彼らがもしソシュールの原資料を読んでいたら、この言語学者の思想について「正しい」理解に至ったというのだろうか。『講義』の不備に、ソシュールの思想の「歪曲」のすべての原因を帰すことができるのか。否、こうした論理は安易な短絡によるものだ。というのも、生の

素材に触れることの重要性などという月並みな教訓に基づいてこの問題を裁断することはできないからである。つまり、『講義』成立に関する文献上の不備は二次的なものであり、むしろ、そうした編纂を導くことになる編者の形而上的な態勢こそが問われるべきである。そういう意味では、編者らの『講義』解釈とそれに基づく編纂の問題は、彼らだけの問題に留まらず、文献上の不備がないはずの原資料を扱う者にもそのまま当てはまる。つまり、『講義』を編纂しようがしまいが、編者のようにソシユールを読む限り生じる問題があるということだ。そうした中で不可避免的に希薄化・矮小化する問題こそが、ソシユール自身が言語の探求において、最も根本に据えた言語単位についての問いなのである。

『講義』編者のとった指針をゴデル¹⁴とエングラー¹⁵は文献学的に説明しようとした。それがソシユール学にもたらした功績はここで改めて繰り返す必要はないであろう。実際、彼らの書物を参照すれば、「素材」がどのように加工されたかをかなりの程度までたどることができる。とはいえず、そうした結果からの帰納だけでは、どうしても見えてこないものがある。ここで注目したいのは、『講義』を生んだ編者の感情ともいうべきものがある。

かくべつ独創的な断章をそのまま紹介してみても、と勧める向きもあり、当初はそうしようかとも思ったのだが、全体を提示してこそ価値のある構成物の断片のみを提示しては、師の思想を歪めてしまうことがその後すぐにわかったのである。¹⁶

いっさいをそのまま出版することなど出来なかった。そんなことをしたら、自由な論述における冗長や重複やその場限りの定式化などによって書物が不統一な体裁を纏うことになる。¹⁷

編者の危惧は、講義録やソシユールの断章といった資料をそのまま掲載した場合、「師の思想」を歪めてしまうのではないかと、いうものであった。そこで「口述につきものの言い換え、ふらつきから思想を抽出」する必要がある。口頭の講義の結果生じる様々な表現や、ソシユール自身の構成上の不備と彼らがみなすものをそのまま発表することは到底できなかったのである。ここでは、「冗長」や「重複」は、本来は一貫しているはずの師の論証から削除すべき贅言であった。そうした一連の作業において編者は、実は、非常に高い能力を発揮していたと言わなければならない。書物は、申し分のない出来を誇る『講義』として世に出た。その過程で、ソシユールが本来言っていないことを編者が書き足したとか、過度に図式化したということは、彼らがそうせざるをえなかった心理的要因と、そうした心的な態勢が『講義』に与えた決定的な影響に比べれば比重の低い問題ではないかと思う。問題は、編者が彼ら自身の方針に忠実である限り、なぜ、言語単位の問題を、ソシユールが実際に行ったのと同じような形で問うことができなかつたのかということにある。ソシユールが言語単位について述べている箇所をあげてみる。

単位の問題は現象を極める問題と根底的に異ならない、現象を極め

ることは、単位の問題を理解する一つの手段なのだ。言語学には単位を扱う以上のことは何一つできない。¹⁹⁾

言語はその全体が一定の諸単位の対立のなかにあり、(中略)単位がなんであれ、それに訴えかけずには一歩だつて進めない。²⁰⁾

こうしたソシュールの発言は、言語学の敷居を跨ぐにあたって、まずは率先して単位の問題について了解しておく必要がある、と言っているようにも読める。単位を画定し、言語学の対象をはっきりさせた後で、それぞれの探求に取り組むべきであるという学問の正當な手順を述べた言葉としてである。しかし、もし本当にそうなら、つまりは、単位の問題が言語学の序章に過ぎないというのなら、『講義』の編者はこの問題を取りこぼすことなく再現できたはずである。論述を細やかにし、論理的な道筋に沿って論証を行えば、言語単位とはどんなもので、それを探求の対象にする言語学者がどう振舞うべきかを説くことなど雑作もなかつたはずである。しかし、単位の問題はそうした論理の中で問うことはできない。そうした論証の平明さをすり抜ける問題なのである。

言語学が行うこうした単位の決定は、たんにその緊急の任務というだけではない。もし、それができてしまえば、言語学はその全任務を成し遂げたことになるであろう。²¹⁾

問題に精通する言語学者がいて、次のことを証明してしまうとする。言語のなかには、第一に來る明瞭な対象が絶対的に存在し、それは分析の手前であつて、あとにはない。すると、私達にはもう書くことがないだろう。いや、そのときに言語学はおしまになる。²²⁾

後者の「書物の草稿」からの引用には単位という言葉自体はないが、双方ともが言語単位について考えることの本当の意味を述べている。単位の問題は言語学の始まりと同時に終焉でもある。これは、慎重に思索しているつもりで、実は逡巡し停滞しているだけの思考が、自己弁護のために持ち出すレトリックではない。言語単位とはなんであるかを考えようとするなら、こうした思考の円環を引き受ける必要があるということだ。では、その始点はどこにあるのか。単位について語ることを可能にするなんらかの先験的な事象は存在するのか。もちろんない。「言語の一側面が、他の側面より先だとか上だとか、出発点であるべきだとか、そんなことを考える権利はいつさいない。」²³⁾ただあるのは、語ろうとすれば溢れ出す言葉の連なりであり、単位について考えるとは、そうした言葉いつさいの連関を引き受けることである。そういう意味において、ソシュールが頻繁に用いる、同一性、差異、価値、實在、事象は単位の問題といつでも同時にある。これらのどれから始めてもいい。ただ、ひとたび始めたら、その円環の内に留まるしかない。

こうした言語単位の事象としての性質と、師の一貫した思想を披瀝することを主旨とする『講義』の書物としての性格は、相当に相性が悪い。

編者が「冗長」「重複」と見なしたものは、口述の講義につきものの余剰などではなかったのだ。それは、言語単位について語ることを可能にする唯一のやり方であった。念のために付言するが、私がこうして述べていることは、私のソーシャル解釈などではない。ソーシャルはそういうやり方で実際に単位の問題を語るのである。

ある読者が私の思索を、この本のはしからはしまでを注意深くたどりたいとする。きっと彼は、厳密な順序をきちんと追うことは、いわば不可能だと思ひ知るだろう。あえて私がやることは、同じ考えを三度でも四度でも違った形で読者の前に引き出すことだ。論証を始めるのに何かほかよりも上等な出発点は、実際ここではひとつもないのだから。⁽²¹⁾

ここで言及されている書物は、未完のまま棄却されたか、着手さえされなかったと当初は思われていたが、つい最近（一九九四年）になって草稿の形で発見された。その中で次の一節は、言語学における出発点の不在を述べるにとどまらず、その不在の理由と、そこにおいてすべき言語学者の所為を示しているという意味において白眉であると言える。

実際、言語学のなかのどれか一つの真理を取り上げて、それに優越性を与え、中心となる出発点に仕立て上げることが不可能なように思える。しかし、五つ六つの基盤となる真理なら存在していて、そ

れらどしは密接に関連し合っているので、どの真理から始めることも可能であり、任意の一つの真理から始めても、残りのすべての真理や同様の帰結をもたらす些細な事項にまで至ることができる。⁽²²⁾

こうした「真理」の相互的な依存が、単位の問題を出発点として特権化することを阻む。「真理」が自律し、その個々の連なりによって書かれる『講義』がそれに付き合うはずもない。『講義』の論証が、言語事象を並列・序列・自律化する一方で、言語単位を問うことは、そうした思考の傾向とはちょうど対極にあるからだ。『講義』が体現するこうした傾向と、ソーシャル自身の論証の性質を対比して表せば次のようになる。

『講義』

ソーシャル自身の思考

論証の並列と一貫性

反復と冗長

「真理」の自律性

「真理」の依存性

弁証法的論証

始点の不在

『講義』の編纂をめぐる諸問題から学びうるものがあるとするれば、それはこの問題が、思考に見られるひとつの普遍的な傾向を表しているということになる。つまり、私達にはいつでも『講義』を生み出す用意ができていくということだ。思考が事象に求める先図上段の項目は、なんらかの思想なり概念なりを有益なものとして消化・消費するための思考の傾向を表している。それは、言語学を言語を対象とする科学として成

立させるために不可欠であり、言語単位の画定のプロセスをこの学問の序章に組み込んで、そこを出発点に始めるには十分に機能している。しかし、そこからこぼれる言語単位についての問いは、この問いを考える者にいつまで続くともわからない咀嚼を強いる。言語学をするとは「五つ六つの真理」について考えることではない。ただ、それゆえに「真理」を「真理」たらしめる先験的な事象などはない。ある事象が孤立して真であるかのように見えたとき、私達は言語を外側から眺めている。それは言語について考えるのをあきらめたときである。

四 言語単位としての「語」

ソシユールは、「語は最も強く画定される単位である」と言う。ここに「強く」という言葉は大事である。この言い方が彼らしいと思えるのは、先に見た構造言語学の観点からは、単位は二項対立の差異によって画定されるものであって、そこには「強く」という言葉で表すような、強度や度合いを示す事象はないからである。しかし、いったい語は、なにより強いと言うのだろうか。語の画定が、その強度においてどんな事象に勝るといえるのか。そこでまず思いつくのは音素や文である。それらに對して、語が強いのは、それが言語意識に表れる時の直接性であると言える。

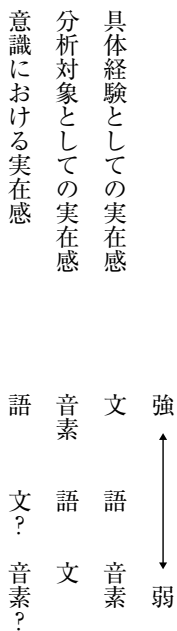
語以外に単位として持ち出せるものはないかを考えてみるのもいい。たとえば、具体的単位は文だけだと言いはる視点がある。(中

略) 文では多様性がすべてだ。もし何か共通のものを見つけたらしたら、または、または語に行きつくしかない。⁽²⁷⁾

語のなかの要素を、こうだと決めるには分析がある。けれども、語じたいが文の分析から来るなどということはない。なぜなら、文は言葉のなか、言述的な言語の中にしか存在しないからだ。ところが、語はひとつの単位で、あらゆる言述の外、心的宝庫のなかに生きている。⁽²⁸⁾

言語の意識が認め、批准するものを観て、これを実在とすること。⁽²⁹⁾

こうした語の実在の尺度を先の図に加えると次のようになる。



音素や文を比較の対象として、それよりも語が強く画定される単位であるというのは、それ自体間違ではない。ただ、「強く」という言葉に込められた意味は、それだけではないような気がする。なぜなら、文は語に對してあまりに異質であり、それを対象に「強い」という度合いを

表す言葉を用いることは、いささか滑稽な感さえるからである。

そこで、強さという概念を別の事象に振り当ててみる。すると、語は確かに「ひとつの単位」ではあるが、単位は語のみを対象とする必要はないということが見えてくる。意識が自らの実在感に照らし合わせて、そこに意味と形態の連合した単位の存在を見い出せるなら、単位はむしろ結合・分離のさまざまな強度の下にあると考えるべきである。具体的には、語を構成する諸要素がそれにあたる。接辞、語根、形態素等の語の構成物は、それが表意単位である限り、単位と言っていないことになる。

基準。実在的なものとは、語る主体がなんらかの度合いで意識しているものことである。それが意識するものがすべてであって、意識できるもの以外はなんでもない。さて、どんな言語状態のなかでも、語る主体は語の単位より下の形態論的——つまりは表意的——単位を意識している。³⁰⁾

こうした上位単位(語)と下位単位(接辞等)の結合・分離の心的現象は、実際には、新語創造や語源分析として日々具現化している。*finir: venir = je finis: X* という比例式から誤って *X = je venis* が創造されるのもそうした意識の働きによる。ただ、ここで創造された形態 *venis* が結果として間違っていることはそれ自体どうでもいい。そうした形態を常に生み出す態勢にあるものこそが言語意識であるということが肝心なのである。³¹⁾

こうした単位の画定とその再結合のプロセスは、形態を受容・生成するという意味において、そこに主体的な活動を想定できることから、ソシュールが用いる「語る主体」(*sujet parlant*) という言葉を連想させる。「ひとつの事柄がどの程度に存在するかを知ろうとしたら、それがどの程度語る主体の意識のなかに存在し、意味を持つかを究める必要がある。」³²⁾ そう彼は言う。ただ、この言い回しにはちょっとしたねじれがあることに注意したい。単位の抽出を行う「聞く主体」ではなく、単位の結合を行う「語る主体」に尋ねるのはおかしくないかという反論もありうるからである。しかし、それは、「聞く」「語る」という言葉を真に受けた結果、言語意識の現象を分析と生成という二つのアスペクトに分離してしまったことから生じた錯覚に過ぎない。つまり「聞く」と「語る」を、そのまま単位の分離と結合にあてはめることはできないのである。「私達は聞くのと同じやりかたで話す。その時基礎になるのは、聴覚印象だけである。それは、単に受け取るものではなく、精神が受容し、私達が行うことを決めるための最高権力を持っている。」³³⁾ 語る主体とは、こうした単位の不断の抽出・結合を表した用語の表面であるといえる。だとすれば、その裏に「聞かれる単位」がもう透けて見えていないだろうか。

ここまでは言語にとって実在といえるものはなにかという問いの下、語がソシュールにとって言語の一次的対象となりうる経緯をたどってきた。そして今、そうした言語意識の現象として言述の発生を、語的な単位の分離・結合によって解明できないかと思ったとき——この問いの普遍的な是非は別にして——私達は、ソシュールのアナグラム研究を、彼

の言語一般に対する思索と同じ位相で考える支度ができたことになる。なぜなら、膨大なアナグラム研究において、ソシユールは、アナグラムを含むと自らが見なした言述の中に目標となる音や語を画定することにほぼ終始しているからである。そういう意味でのみ、アナグラム研究のソシユールは、一般言語学のソシユールと同じであるし、同時に、違っているとも言える。一般言語学とはまるで別人の「もう一人のソシユール」などという根拠のない期待を抱くことなく、彼の思索が呈する同質的な持続を読み取りたいと思う。

五 アナグラム研究

印欧古典文学において詩人のだれもが秘密裡に守ってきた法則——その存在を信じ、ソシユールはその法則の謎を解き明かそうとした。アナグラム研究と呼ばれるソシユールの一連の思索は一九〇六年に始まり一九〇九年まで続く。その期間に計百冊を越えるノートが書かれたというのだから、彼がこの問題にどれほど膨大な時間を費やしていたかがうかがえる。一方でソシユールは、翌一九〇七年一月十六日からジュネーヴ大学で第一回一般言語学講義を始め、これは中断を経て一九一一年の第三回講義まで続くことから、これがちょうどアナグラム研究の時期を覆っていることがわかる。

以下ソシユールのアナグラム研究について述べるにあたって、断っておきたいことがある。通常、アナグラム (anagrammes) という文、文字の並び換えによってなんらかの語を紡ぐことを意味するのだが、ソシ

ユールがこの言葉の下に行う探求は常に音を扱っている。ソシユール自身もこうした点について言及しており、アナグラムという用語の正当性に疑問を呈している³⁴。同時に、彼が使用する他のいくつもの用語もめまぐるしく名称が変わる。名称の変更は単なるレッテルの貼り替えではなく、対象となる事象へのソシユールの取り組み方の変遷を表しており、もちろんそれ相応の意味があるのであるが、ここでは煩瑣を避け、比較的頻度の高い用語ですべて統一しておくと思う。

一九〇六年七月十七日付けのバイイ宛の書簡³⁵でソシユールは、サトゥルス詩 (saturnien) という、碑文や古代の作家の引用でしかほとんど残っていない古詩についての自らの研究の経過を報告している。サトゥルス詩をギリシア起源の印欧古典詩と見なすことに懐疑的であったルイス・アヴェエは³⁶、同音要素の反復を、サトゥルス詩固有の単なる韻律上の装飾もしくは技巧に過ぎないと見なしていた。こうしたアヴェエの見解に対して、ソシユールの反論はこうである。ギリシア詩の六脚詩行³⁷の基本単位である長・短・短からなるダクテュロスの音節群がスポンダイオスの長・長の音節群と置きかえ可能であり、また行末では常にこの置き換えがおこることから、ダクテュロスがスポンダイオスによって置きかえ可能ならスポンダイオスを韻律の基調とするサトゥルス詩は、ギリシア詩と起源を同じくするはずである。韻律の解釈のくだりはやや煩瑣ではあるが、ここには注目すべき点がある。それは、ソシユールのアナグラム研究を今後に導くことになる普遍化と全体化の傾向を示す論証である。ソシユールが主張しようとした、サトゥルス詩とギリ

シア古典詩の「共通起源説」は、アリテラシオン「頭韻（以下アリテラシオン）」というサトゥルヌス詩に見られる韻律上の特徴が、印欧詩に広く見られる現象ではないかという仮説に端を発している。とはいえ、まだこの時点では、ソシユールには、より普遍的な韻律の規則を解明したいという程度の動機しかなかったことであろう。事態が動き出すのは、こうしたアリテラシオンがもたらす音の反復が、いかなる詩のいかなる詩行をも律するはずだ、という思いに彼が駆られるあたりからである。

通常、アリテラシオンは、押韻という韻律上の効果によって、特定の詩脚に強勢部 (*caetus du vers*) を生じるが、それから外れる音節は対象にならず、それゆえ、この規則は特定の条件下で働く韻律上のひとつの技法におさまる。一方で、ソシユールがアリテラシオンの名の下に見しようとするのは、詩行全体を律する、より広範囲に渡るなんらかの法則であった。そのためにソシユールは、アリテラシオンの語頭音の反復という事象と、自らが目指している法則との齟齬を懸念する。やがてソシユールは、通常の意味でのアリテラシオンの枠組みを越えて、この韻律の本性である語頭音反復を「拡大」することで、「同一音の反復」という事象を、詩にとっての全的な法則として定義することになる。「サトゥルヌス詩において従来注目されていたアリテラシオンという現象は、そのすべてが、より一般的な、というよりはまったく全体的なひとつの現象にすぎません。」³⁷ここに至って同音の反復は、強勢や強調といった詩の特定部分とだけ関連する韻律上の付随的効果であることを止め、詩行の全音単位の存在を秩序づけるソシユール独自の法則となる。

こうして、通常のアリテラシオンの意味を飛躍的に拡大する過程で、ソシユールは新たな発見をする。それは、詩文中の音単位は同一の音単位を偶数個持ち、それぞれが対応し合うという法則である。彼はこの規則をクープレゾン (*couplaison*) と名付ける。

サトゥルヌス詩中のすべての子音は、同一の詩中での場所を問わず反復するようになっていく。さらに言えば、子音は反響することによってのみ存在できるのだ。従って、ひとつの *l* なり *t* があれば、そこにそれぞれひとつずつの *l* と *t* が加わる。(中略) つまり、韻文中において、同一の子音は偶数個である必要がある。奇数にさえならなければ、数は二・四・六・八などどれでもよい。³⁸

通常のアリテラシオンが子音を対象とするのに対して、ソシユールのクープレゾンの法則では母音も同様の規則に従う。³⁹もちろん、この法則について、常識的な立場から反論が容易なのは言うまでもない。任意の音単位が韻文中で偶数個存在するか奇数個存在するかは、確率的に考えれば半々であるからだ。こうした反証の可能性は今後もソシユールが克服すべき障害となる。しかし、それはソシユールの探求を思いとどまらせるどころか、むしろ彼の仮説をより広い範囲へ浸透させる動機となる。ソシユールの解決法はこうである。ある詩行において、任意の音単位が奇数個のことは確かにある。しかし、この余った奇数個の音は、次の詩脚にある同一の音とペアになることで補填されるといふ。ソシユールは

単に「次の詩行」(vers suivant)とも言っているので、このクープレゾンの範囲が韻文中のどこまで及ぶかはそれほど明確ではない。ただ言えることは、このクープレゾンの規則によって、観察者は詩行の全体を余すことなく視野に入れることになる。「視野に入れる」とは、特定の音単位を求めて、詩行中の音を数えるということである。特定の韻律を確認するために数えるのではない。ただ、同じ反響を求めて詩行を彷徨するのである。

こうして、クープレゾンが登場することで、アリテラシオンは用語としての地位を奪われたかのように草稿中から消えていく。クープレゾンがもたらす法則の適用範囲の拡大は、法則が詩作の結果偶然生じたものではなく、詩人が詩作において常に心掛けるべき法則、さらに言えば、詩作を導く原動力であるという考えをソシユールにもたらす。これを機に、以降、法則の発見と検証の主導権が完全にソシユールの側に移っていくのである。

検証の過程において、反復する音素材の同一性についてのソシユールの厳密さは相当なもので、そこには自らの法則を無理にでも押し通そうとする強引さは微塵もない。「ただの一語を変えたり移動したりするだけで、アナグラムについて必要とされる数々の結合が、ほとんどの場合で混乱してしまうような体系においては、アナグラムを作詩法上の装飾的な遊びであるときみなすことはできない。アナグラムは詩人が望むと望まざることにかかわらず、作詩法の基礎である。」⁴⁰「こうした普遍化の意志と、それと同時にある厳密さへの執着が、時に猛烈な反省をもたらすことは

言うまでもない。その都度ソシユールは法則を緩和することに対応する。当然の結果として、アナグラムは増殖し続ける。検証の作業はさらに広範囲に及ぶ。しかしそれでもなお、自らの法則があるという確信が揺らぐことは決してない。

この詩行全体が参与する音の法則とほぼ時を同じくして、もう一つの法則が表れる。それは語を対象としたものである。詩行中には、その詩行の意味と関連のある語が、音素材の形で散在しているという法則である。ソシユールはこの語をテーマ語 (not-thème) と名付ける。クープレゾンとテーマ語の二つの法則は、残された資料を見る限り同時期に共存していたようだ。とはいえ、この二つの法則は、前者が音の反復を律するのみであるのに対し、後者は、意味を介在して語を画定することによって、詩行と語の間に二重の関係を生み出す。ここに、文献的な検証とは違う意味での思索上の前後関係を設定してみたい。アリテラシオンからクープレゾンへの転向がもたらしたものは、音の反復が詩作を律するという意味においての普遍性といえた。しかし、今度は、詩行に存在する語を画定することで、語と、詩行を構成する言述の同一性という詩作の枠組みをこえた普遍性が問われるのである。そして本稿の主旨に即して言えば、こうした詩行の下に語を見つけることを、一般言語学における単位画定の問題とどう接近させて読むことができるかが問われるべきであろう。

六 テーマ語——言述中に実在する語——

ソシユールのアナグラム研究の多くの割合を占めるテーマ語（詩行の中に存在し、その詩行の意味と関係の深い名）を見出す作業とは、例えば、*Donum amplom victor ad mea templa portato.*（勝利者よ、我が神殿に多くの供物を捧げよ。）という一節に、*APOLLO*（アポロン）という語を画定することである⁽¹¹⁾。見出されたテーマ語は、やみくもに音を集めて作られた音の連続ではない。その語があることの必然性は、「意味」の面からも保証される必要がある。それは、詩行自体には、たとえその名がなくても、デルフォイの神殿に供物が捧げられる場面でアポロンが登場するのは当然のことであるというものである。無論、ここでもこうしたテーマ語の画定はいつでもうまくいくわけではない。音素材の余剰や欠落によって、ソシユールはその釈明を自らに課すこととなる。正当化についての注釈は、必ずしも私達読み手にとって説得力のあるものではないが、しかし、ソシユールの確信は、そうした正当化の作業以前に存在するかのようだ。それが検証の中で反証されようとも、そのことはせいぜい仮説に対する僅かな修正しかもたらさない。証拠は自らの意識の实在性他にはない。「その語がある」というのがなよりの証拠ではないか——ソシユールの確信の根拠はそういう実在感からきている。

先の詩行において、ソシユールは *AD MEA TEMPLA PORTATO*（我が神殿に捧げよ）の一節に語を画定していた。この詩行全体が再現するテーマ語の *APOLLO* が、*アポロ* は、*A* で始まり、*O* で終わる四語の連続

の中に表れ、*l* が一つ足りないことを除けば、これは見事なアナグラムの例であると言える。テーマ語の素材をより高い密度で含むこうした一節（時には一語のこともある）は首座（*locus princeps*）もしくはマヌカ（*manequin*）と呼ばれ、詩行全体の中でとりわけアナグラムが集中的に表れる場所であると定義される。アナグラム研究がテーマ語の画定を主として以来、ソシユールの検証作業は、ひたすらこうした語を詩行の中に見つけることであつた。そして、これが印欧詩（さらには散文までも）を律する普遍的な法則であるという確信に動かされたソシユールは、印欧古典文学のみならず後代の作家の作品にまでアナグラムを求めたのであつた。

ソシユールがアナグラム研究を断念したのは、彼がみずからの法則の是非を二度に渡って書簡で尋ねたポローニヤ大学の詩人パスコリから二度目の書簡に対しての返事が届かなかつたのが直接の理由ということになつている⁽¹²⁾。それは正しいと思う。ただ、私はこの断念を、ソシユールの思索の延長上に必然的に表れる問題として捉えようとしてここまで話しを進めてきた。それは、この必然性が、ソシユールが言語＝ラングを考へることの可能性とその限界によつてもたらされたと思うからである。

七 ラングの彼岸にあるもの⁽¹³⁾

ソシユールのアナグラム研究は、その作業において驚くほどの一貫性を呈していた。詩行を構成する言述中の音において対となる音を求めること、音を素材としてテーマ語を紡ぐこと、この二つのことしか彼は行

っていないと言える。こうした画定作業への専心に、一般言語学で単位を画定しようとするソシユールとの類似を見ることは容易い。これから、結びに向けて展開する論証は、アナグラム研究においてソシユールが、テーマ語を画定すべき単位であると考えながらも、その実在性の確認が十分に得られなかった理由を考えるものである。その作業自体は単純なものになるであろう。ここまで見てきたソシユールの言語単位の画定の仕方を、ほぼそのままの形で、彼のアナグラム研究に投影すればいいのである。

ソシユールにとって語^{II}単位の実在性は、意識における直接性であった。語は、言述からの分析や抽出によって存在の基盤を与えられるものではなく、いつさいの分析に先だって存在しているからである。「犬が吠える。」の分節化から、「犬」が単位として表れるのではなく、「犬」はすでに意味と形態を伴った二重の存在として意識にある。また、語の下位単位の構成物である接辞等が言語であるかどうかの問いに対して、ソシユールは躊躇なく答える。なんらかの度合いで意味を持つ形態である限り、それは語と同様に言語中に実在すると。それでもソシユールがランダの単位について多くの言葉を残したのは、意識に直接発生するこうした単位が、言語を語る際の多くの言葉——同一性、価値、実在、差異、現象——との共振の中でしか語れなかったからだ。

こうした意識に実在する単位の側から、言述の発生を説明できないだろうか。次の一節はそういう問いを投げかけているかのように見える。このヴェエダ詩編の研究ノートに書かれた一節は非常に示唆に富む。

言語はただ言述を^{ラング}目指してのみ創られている。言語と言述を隔てるものとはなにか。もしくは、言語が、ある瞬間に言述として活動し始めると言えるのはなぜか。多様な概念がそこにはあつて、ランダのなかで用意ができている。(それはつまり、言語の形態を纏つていくということである。)⁴⁵「牛」「湖」「空」「強い」「赤い」「悲しい」「五」「割く」「見る」などがそれにあたる。いつ、いかなる操作によつて、それらの間で確立されるいかなる働きによつて、いかなる条件によつて、それらの概念は言述を形成するのだろうか。

言述についての問い自体は、すでにそれ以前の草稿にも見て取れる。したがって、アナグラム研究と言語の言述化の問題は分けて考える必要がある。しかしそれでもなお、スタロバンスキーがこの一節を、ソシユールのアナグラムを紹介した自らの著者の冒頭に掲げたように、ソシユールのアナグラム研究を総括しようとするなら、感傷的な述懐を含むこの一節にはそれだけの説得力がある。スタロバンスキーはソシユールのアナグラムにフロイトの無意識との類似を見出し、事実、それは多くの共感を⁴⁶得た。しかし、言述化の問題が、ソシユールに克服しがたい困難を投げかけたということを本気で言いたいのなら、ソシユールの単位画定をめぐる思惟が、アナグラムの言述に襲いかかるさまを間近で見て取るしかないように私は思う。

結論が一番大事というわけではないので結論から言うなら、ソシユールが詩行とテーマ語の関係を確立するためには、その関係が、ランダ中

の語とその下位単位（接辞等）の関係と同様なものとして存在している必要があったのである。語は下位単位に分析・分離できる。それは、それらの下位単位が、意味と形態の両面において、上位単位である語にある程度参与しているからである。「ある程度」というのは、分離・結合する作用までも含めてそれが単位といえるので、これは形態の静的な眺めからは見えてこないからである。通常一語に思える chanteur（歌手）が、それに対する意識の度合いによって、chanteur（歌／手）として分離して感じられることはそうしたことが原因といえる。chanteur がいくつの単位から成っているかという問いは、単位がそうした分離・結合の作用とともにあることを知ってしまったえば愚問であって、chant と eur がそれぞれ、ある程度 chanteur の中にある、と言えは話はそれで済んでしまう。そして、ソシユールは、こうした分離・結合の単位の心的な現象の中に、つまりは語という実在について直接与えられた意識の中に、アナグラム詩行全体を吸収できないかと問うていたのである。詩行に APOLLO は、語として存在している。この語を詩行において画定するためには、APOLLO が接辞や語根のようなものとして、この詩行の意味と形態に関わる必要があった。しかし、APOLLO が意識中に実在する強度に比べて、その単位を同じく実現しているはずの詩行は、なんと取り繕いようもないほど、異質で多様な意味と希薄化し散在した素材からできていることか。二つの事象はなぜこうも違うのか。共通の原理や折衷点はないものか。こうした語と詩行を隔てる空隙を少しでも埋めるべくソシユールが行ったのが、マヌカンを巡る一連の思索であろう。マヌカン

はテーマ語の素材が、他の詩行に比べ密度が高く表れる場所であり、それは実在感の強度においてテーマ語と詩行の音素材の中間に存在する意味・形態を備えたものであると、そうソシユールは考えた。確かに、テーマ語はマヌカンの一節で、すでに素材として分離してはいるが、また他の詩行に比べれば、語の名残を留めているかのようである。もちろん、マヌカンを、この文脈を離れて「ソシユールは語と言述の中間態を想定した」として一般化することには飛躍がある。ただ少なくとも、これが、テーマ語と詩行の間にある空隙に投じられた松明のように、その闇を僅かに照らしてはいまいか。テーマ語と詩行を隔てる絶望的な異質性が、ソシユールがアナグラムについて書くにあたって、なにをもたらし、なにを奪ったか。そうした獲得による原動力と喪失による制動力がアナグラム草稿の筆致の律動を決定しているのだ。そこにある空隙は、むなしさや喪失感といった心理的なものとは無縁である。そうした外的な要因はたとえあったとしてもはるかに副次的なものである。探求は、言語の実在性をめぐる問いの延長にあり、その質を変えることなく続く。そこに言語的な単位があるという確信があればそれでいい。その確信を捨ててまで、彼岸にある事象に安易に身を投じることなどどうしてできようか。ソシユールはそこに踏みとどまったのである。

さて、いつの間にか、知らず知らずのうちに「彼岸」にいる私達にできることとはなんだろうか。まずは、なぜ彼が此処に来なかつたかを考えることから始めてみてはどうだろう。

注

- (1) 音素と音韻については、本論において特に区別の必要はない。
- (2) 丸山圭三郎『ソシユールの思想』、岩波書店、一九八一年、一三四頁。
- (3) 丸山圭三郎編『ソシユール小辞典』、大修館書店、一九八五年、二八五頁。執筆者一覧により、この一節が丸山圭三郎氏自身の執筆であることが確認できる。
- (4) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bailly et Albert Séchehayé avec la collaboration d'Albert Riedlinger, édition critique préparée par Tullio de Mauro, Payot, 1967 (reproduit et achevé d'imprimer en 2000), p. 166 (cité par la suite: *Cours*).
フェルディナン・ド・ソシユール『一般言語学講義』、小林秀夫訳、岩波書店、一九九一年（一九四〇年）、一六八頁。同書からの引用に際しては小林秀夫氏の訳を参照した。
- (5) F. de Saussure, *Deuxième cours de linguistique générale (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et Charles Patois*, texte français établi par Eisuke Komatsu, Pergamon, 1997, p. 4 (cité par la suite: *CLG/K/R(II)*).
フェルディナン・ド・ソシユール、前田英樹訳・注『ソシユール講義録注解』、法政大学出版局、一九九一年、七頁。同書からの引用に際しては前田英樹氏の訳を参考にした。
- (6) Roman Jakobson, *Six leçons sur le son et le sens*, Paris, Minuit, 1976, p. 60.
- (7) F. de Saussure, *Premier cours de linguistique générale (1907) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger*, texte français établi par Eisuke Komatsu, Pergamon, 1997, p. 21 (cité par la suite: *CLG/K/C(II)*).
- (8) *CLG/K/C(I)*, p. 51.
- (9) レオナルド・ブルームフィールド『言語』、三宅鴻、日野資純訳、大修館書店、一九六二年、三二頁。
- (10) Ferdinand de Saussure, *Ecrits de linguistique générale*, texte établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler, Gallimard, 2002, p. 117 (cité par la suite: *Ecrits*).
- (11) 時枝誠記『国語学原論』、岩波書店、一九七六年（一九四一年）。ここでは主に三章の文法論を参考にしている。
- (12) Simon Bouquet, *Introduction à la lecture de Saussure*, Payot, 1997, p. 3, p. 279.
- (13) *Ibid.*, p. 279.
- (14) Robert Godel, *Les Sources Manuscrites du Cours de linguistique générale*, Droz, 1957.
- (15) Rudolf Engler, *Cours de linguistique générale, édition critique*, fascicule 1-4, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1967-74.
- (16) *Cours*, p. 9.
- (17) *Ibid.*, p. 10.
- (18) *Ibid.*, p. 10.
- (19) *CLG/K/R(II)*, p. 117.
- (20) *Ibid.*, p. 49.
- (21) *Ibid.*, p. 59.
- (22) Ms. fr. 3951 N12. in Rudolf Engler, *Cours de linguistique générale, édition critique*, fascicule 4, Wiesbaden, Otto Harrassowitz, 1967-74. 前田英樹編・訳・著『沈黙とソシユール』、書肆山田、一九八九年、一九三頁。本稿における『書物の草稿』「形態論」「断章」からの引用に際しては前田英樹氏の訳を参照した。
- (23) *Ibid.*, p. 192.
- (24) *Ibid.*, p. 163.
- (25) *Ecrits*, p. 17.
- (26) *CLG/K/R(II)*, p. 29.

- (27) *Ibid.*, p. 20.
- (28) *Erzts*, p. 117.
- (29) *CLG/K/R(II)*, p. 63.
- (30) *Erzts*, p. 183.
- (31) 正しいフランス語では動詞 *venir* の直説法現在一人称単数は *je viens* となる。
- (32) *CLG/K/R(II)*, p. 49.
- (33) *Erzts*, p. 142.
- (34) 例えは、音を対象にするなら anaphonie の方がよいのではないかという提案を「*Les mots sous les mots*, Gallimard, 1971, p. 27 (cité par la suite: *MSM*)」ジャン・スタロバンスキー著、金澤忠信訳『ソシユールのアナグラム 語の下に潜む語』水声社、二〇〇七年。同書からの引用に際しては金澤氏の訳を参照した。
- (35) バイイ宛書簡。 *Cahier Ferdinand de Saussure* 44, 1990-1991, p. 43 (cité par la suite: *CFS*) に収録。
- (36) アヴェエの書物への具体的な言及はないが、 *Cours élémentaire de métrique grecque et latine*, Paris, Librairie Ch. Delagrave, 1896 などが考えられる。
- (37) *MSM*, p. 30.
- (38) *CFS* 44, p. 46.
- (39) ソシユールは次のように言っている。「母音が韻文中に登場できるのは、対母音があるときのみである。」 *MSM*, p. 21.
- (40) *MSM*, p. 30.
- (41) *Ibid.*, p. 69.
- (42) 一度目は一九〇九年三月十九日。二度目は一九〇九年四月六日。
- (43) 「言語」については、ラングとして特に読んでもらいたい時のみ「ラング」とルビを施した。
- (44) 本論においては、「言述」と「文」の使い分けは文脈によるもので、理論装置として厳密に定義しているわけではない。「活動の状態にあるラング」という程度の意味である。
- (45) *MSM*, p. 14.
- (46) Jean Starobinski, *op. cit.* 主に日本語版の序文を参照。